



政府が次々と繰り出す少子化対策にもかかわらず、わが国の少子化の流れは一向に収まる気配を見せない。
 では、なぜ子どもは生まれにくくなったのか。かつては西欧の人々から「子どもを愛する民族」として賛嘆された日本人は、はたして子ども嫌いになったのか。
 少子化の根底にあるもの

本田 和子著

子どもが忌避される時代

を、「子ども忌避」という心性にあるととらえる著者は、そうした心性に支配されるような時代へと推移した背景を、さまざまな知見や各種の文献・調査資料を駆使して探っていく。しかも、そこで取

「産み育てる」がなぜリスクになったのか

り上げられるものは、江戸期の日記あり、西鶴ものあり、さらにマンガ、児童文学から今日の投稿メールに至るまで実に多様である。次々と繰り出されるこれらの小道具を巧みに用いて、著者は、「産み

育てる」営みが、なぜリスクにとらえられるようになったかを繰り返し追求する。
 例えば、一見何のつながりもないように見える流通革命や子どものために創出された商品が、どのようにして「子

に、次第に気づかされていく。子どもを「産み育てる」とは、時間と労力と財力を必要とする営みである。だが、「子ども」には、これまで、「家」の継承者や「国家」の担い手としての役割が期待さ

京都女子大学教授

川勝 泰介 評

になってしまった。こうした考え方が、頻発する虐待や子殺しといった子育てを忌避する心性と同一線上に並んでいるのではないかととして、著者は、改めて「産み育てる」と何が持つ公共性を主張する。
 (新曜社 2940円)
 ☆ほんだ・ますこ 1931年、新潟生まれ。お茶の水女子大学卒。同大学学長を経て、お茶の水女子大学名誉教授。専門は子ども学、子ども史、子ども文化論。著書に『異文化としての子ども』『子どもたちのいる宇宙』『少女浮遊』など多数。